

平成 24 年度

新入生歓迎演奏会

(第 7 回オルガン演奏会)



平成 24 年 4 月 19 日 19:00 開演

ごあいさつ

皆様、本日はお忙しいところお越し下さり、誠にありがとうございます。一同張り切って演奏致しますので、最後までお付き合い下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

さて、私達オルガン同好会は、基本的には非常に自由な活動をしております。オルガンを弾いても良し、他の楽器を練習しても良し、宿題を解いていても良し。時には、若干アナーキーな香りすら漂って参ります。

しかし、自由とは単なる放縦ではなく、必ず自律を伴わなければなりません。更に言えば、自律できる範囲内でのみ保たれるもの、つまり、締めるべきところで締めるからこそその自由なのです。

オルガン同好会の締めるべきところは、三つあります。一つ目は、オルガンを大切にすること。二つ目は、練習の際の譲り合い。三つ目は、演奏会をしっかりと行うこと。前二者は当たり前のことですが、後者も大切なことです。年に数回は演奏会を催さなければモチベーションが上がりませんし、催す以上は、下手は下手なりに努力して、聴きにいらして下さった皆様方が楽しめるよう、ベストを尽くさなければなりません。

今回、この演奏会を催しましたのは、オルガン曲の紹介と共に、普段の練習だけではなかなかわからない、私共の真面目な部分をお伝えするという目的も兼ねております。演奏会の後で、「オルガン同好会に入りたい」という方を一人でも増やすことができれば、大変嬉しく存じます。

まだまだ演奏技術は未熟な我々ですが、皆様方がオルガンの音色を楽しめるよう、精一杯演奏致します。どうぞごゆっくりお楽しみ下さい。

2012 年 4 月 19 日 オルガン同好会一同

プログラム

J. S. バッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750)

トッカータとフーガ ニ短調 Toccata und Fuge d-Moll, BWV 565

『シュープラー・コラール集』より「目覚めよ、と呼ぶ声が聞こえ」

Schüblerschen Choräle für Orgel – Wachet auf, ruft uns die Stimme, BWV645

J. パッヘルベル Johann Pachelbel (1653-1706)

3つのヴァイオリンと通奏低音のためのカノンとジーク ニ長調 より カノン（合奏）

Kanon und Gigue D-Dur für drei Violinen und Basso Continuo – Kanon

Organ : 平澤 歩 Hirasawa Ayumu

Recorder : 加藤 広和 Katô Hirokazu

D. スカルラッティ Domenico Scarlatti (1685-1757)

ソナタ イ長調 Sonatas La mag., K. 208 K. 209

Organ : 相川 拓也 Aikawa Takuya

G. F. F. ヴェルディ Giuseppe Fortunino Francesco Verdi (1813-1901)

歌劇「アイーダ」より 凱進行進曲 Aida – Marcia trionfale

C.-M. ヴィドール Charles-Marie Widor (1844-1937)

オルガン交響曲 第6番 より 第4楽章

Symphonie n°6 pour orgue, op. 42-2 – IV. Cantabile

野路 知子 Noji Tomoko

早春 Early spring

L. V. J. ヴィエルヌ Louis Victor Jules Vierne (1870-1937)

オルガン交響曲 第1番 ニ短調 より 第6楽章「フィナーレ」

Symphonie pour orgue n°1 en ré mineur, op. 14 – VI. Final

Organ : 貝田 龍太 Kaida Ryûta

J. S. バッハ Johann Sebastian Bach

管弦楽組曲 第3番 二長調 より アリア (G線上のアリア)

Orchestersuite Nr. 3 D-Dur, BWV 1068 – Air

D. ブクステフーデ Dieterich Buxtehude (1637?- 1707)

「主に感謝せよ、主慈しみ深きゆえに」

Danket dem Herrn, denn er ist sehr freundlich, BuxWV 181

Organ : 加藤 広和 Katô Hirokazu

J. S. バッハ Johann Sebastian Bach

「ああ、神にして天」 Ach, Gott und Herr, BWV714

フーガの技法 より 第1番 Die Kunst der Fuge, BWV 1080 – Nr. 1

J. P. スウェーリンク Jan Pieterszoon Sweelinck (1562 - 1621)

半音階的幻想曲 Fantasia d-Moll

近藤 浩治 Kondô Kôji (b. 1960)

スーパーマリオブラザーズのテーマ (1-1) Super Mario Bros. Theme

Organ : 豊岡 啓人 Toyo'oka Hiroto

猛禽自画像

v
(-_-)
(> >
~/|

名前:河村久仁子

メール:organ@quni.biz

わたし

猛禽系女子

餌がきたときだけ

瞬間的に、動く。

それ以外一日不動

演奏者紹介

平澤 歩（人文社会系研究科博士課程）

大学院生のどん詰まりに差し掛かって参りました。オルガンを初めて触ったのは大学入学以降ですが、それから6,7年以上は経っております。こんな私が「オルガン同好会に入ると、4年間でこんな曲が弾けるようになるよ」と言って何か弾くのはちょっと反則ですので、以前、大学一年生が演奏した曲を弾くことに致しました。「トッカータとフーガ ニ短調」「目覚めよ、と呼ぶ声が聞こえ」は、いずれも、以前の駒場祭演奏会で、当時一年生だったメンバーが弾いたものです。また、「パッヘルベルのカノン」は、一昨年に加藤広和と合奏したのを、もう一度演奏致します。

オルガンの練習というのは、最初はしんどいものです。練習しても練習しても、足鍵盤がうまくならないような気が致します。しかし、ある日突然、弾けるようになります。つまり、最初は目に見えない成長ばかりで、それを積み重ねた末に、目に見える成長を手にすることができるのです。

私がオルガンを練習し始めた時は、月に2,3回しか練習時間がなかったこともあり、毎回毎回「全く上手くなっていない気がする」という思いとの戦いでした（後に、オルガン委員会のゴチェフスキ先生の計らいで月7,8回に増え、更に現在では10回以上もの練習の機会を得られるようになっていきます。感謝）。もう一回あれをやれ、と言われたら、投げ出さずに続けられたかは、疑問です。しかし、弾けるようになると、大変面白いのも事実です。ピアノでは超絶技巧になってしまうような曲を、足鍵盤のあるオルガンなら、いとも簡単に弾けることがあるからです。

大学一年生の頃、大学生活であれをやろう、これをやろう、と色々考えていました。その半分は実現し、その半分は実現しませんでした。そして、オルガンは、当初全く考えたこともなかったもので、とりあえず始めてみたに過ぎません。しかし、今振り返ってみると、あそこで何となく始めてみたのが、とてもラッキーなことであったと思います。様々な曲を弾けるようになり、そして様々な人間と出会うようになったきっかけは、「とりあえず」だったのです。

大学生活というのは、何があるか分からないものです。計画通りに行かないことが多く、そして、それ以上に、予想外のチャンスも転がっています。今日この演奏会に来たことも何かの縁だと思って、星の数ほどある可能性の中で、「パイプオルガンを弾く」ということも選択肢の一つにして考えて頂ければ、と思います。

相川 拓也（総合文化研究科博士課程）

大学院総合文化研究科 D1 の相川拓也と申します。この4月から東大に移ってきました。好

きなものは酒と煙草と辛い食べ物、それに自動車レース（観戦）です。

ドメニコ・スカラッティ（1685～1757）はナポリに生まれポルトガルとスペインの宮廷に仕えた作曲家で、500 曲以上を数える鍵盤楽器のための作品で知られています。現在「ソナタ」と呼ばれているそれらの単一楽章の作品は、20 世紀に入ってからアメリカの音楽学者・チェンバリストのラルフ・カークパトリックによって整理され、作曲年代順にカークパトリック番号（K.）が付けられています。

ドメニコ・スカラッティのソナタは、通常チェンバロやフォルテピアノで演奏されることが多いのですが、この教室にあるような小型のオルガンでも魅力的に響きます。今日演奏するのは、美しい旋律が印象的な K. 208 と躍動的なリズムが特徴の K. 209 の、対照的なイ長調の 2 曲です。

貝田 龍太（工学部）

駒場のサークルでありながら駒場生があまり来ないことで知られるオルガン同好会の演奏会ですが、今回は一応は新入生の勧誘を兼ねた演奏会です。ということで、駒場時代に弾いていた楽譜を再び引っ張り出してみました。

「アイーダ行進曲」は駒場時代に練習しながら演奏会では弾かなかった曲で、つまり没ネタです。ご存知の通り、原曲はオルガン曲ではありません。19 世紀以前の名曲には 2 台ピアノやオルガンのための編曲譜が作られていることが多いのですが、録音機器のない、または未熟な時代、大編成の楽曲に触れる比較的簡便な手段として大いに需要があったのでしょう。没にした理由は、曲自体は言うまでも無き名曲・名旋律ではあるものの、純粋なオルガン曲としてはそれほど面白みがないため（編曲作品全般に言えることではありますが）。それでも、オルガンの最大の魅力であるところの、密集和音による圧倒的な音量を十分に楽しむことができます。編曲者は H. R. シェリー（1858-1947）。アメリカのオルガニストであり、自作には「オルガンのためのファンファーレ」等があります。

ヴィドールは、1 年生の時に演奏会で弾いた思い出の曲。オルガン歴半年の当時でもとりあえず弾けた、程度の難易度ですが、今までに弾いた曲の中でも屈指の名曲だと思います。穏やかな楽章ですが、異なる音色を持つ鍵盤が時に重ねられ、時に対比されつつ絡み合って展開していく様は、オルガンを複数の楽器の集合体とみなし、オーケストラの楽器のように重ね合わせて音響を組み立てるといって、オルガン交響曲の思想を見事に表現しています。爽やかで温かみのある、魅力的な旋律も一級品。ヴィドールは「トッカータ」の印象からか、派手なリード管をガンガン使うゴージャスな作曲家、とされている節がありますが、それはある一面に過ぎないことをこの作品は教えてくれます。

「早春」はエレクトーン用に作曲された曲。ヤマハが主催するジュニアオリジナルコンサート（JOC）というものがあり、子供の自作曲が演奏されます。「早春」はそんな JOC 作品の 1 つ。エレクトーンの学習者が 1 度は弾く曲で、短くも情緒感に満ちた佳作です。エレクトーンの曲

は、オルガンで弾いてもあまり効果的でないことが多いのですが、この曲はむしろ、オルガン曲であったとしても違和感がないように思えます。

ヴィエルヌは 2 年生の時に弾いた曲。ヴィエルヌはオルガンの達人で、演奏技巧もさることながら、即興演奏に非常に長けていたことで知られます。ドビュッシーやラヴェルら、同時代のモダニストの動向にも影響を受けたと見えて、堅牢さを保ちつつも洗練され、かつオルガンの効果的な鳴らし方を熟知した書法が目立ちます。第 1 交響曲のフィナーレはそんなヴィエルヌの代表作で、動画サイトで検索すればずらりと並び、Wikipedia に行けばクリック一つで音が流れるというオルガン界屈指の大ヒット曲。伝統的なソナタ形式で構成されていますが、常動的な音型が全曲を一貫する辺りに、印象主義の趣向が刻まれている気がします。ヴィエルヌの他の代表作には、学校のチャイムに使われているあの音を折り込んだ「ウェストミンスターの鐘」があり、即興演奏の技法の集大成のような作品に仕上がっています。

アイダとヴィエルヌの交響曲では、派手に足鍵盤を使います。手鍵盤しか弾いたことのない人には難しそうに見えるらしいですが、所詮は 1 音、時々 2 音を要求されるだけなので、手に比べれば遥かに容易です（つま先と踵で 2 音ずつ = 4 和音も可能だが、あまり使われない）。その手鍵盤も、ピアノほどのシビアさはありません。手足の連動はそれなりに練習する必要がありますが、慣れればピアノよりもよっぽど楽だと思います。

振り返ってみると、駒場時代は交響曲ばかりにこだわっていた気がします。高校まで吹奏楽をしていたので、オーケストラ的なサウンドを一人で鳴らしたいという願望があったのかも知れません。吹奏楽部で担当していた楽器はドラムとキーボード。それとは無関係にエレクトーンもちょっと弾いていました。オケにもエレクトーンクラブにも行かず、またバンドを組む事もなく、オルガンのようなマイナー系サークルに参加しているのは、独特のゆるーい雰囲気はどうも居心地よいのと、900 番という大きな教室で、たった一人で巨大な音をバリバリ鳴らせるのが痛快この上ないからだったりします。

加藤 広和（文学部）

今年度から駒場を離れ本郷に通うようになりました。駒場に通っていた頃は早く本郷に行きたい一心でしたが、いざ移ってみると駒場でやり残したことも色々と思い出されてきます。それに駒場も年々様変わりしていくようで、駒場の様相に隔世の感を覚える日も決して遠くはなさそうです。まあふるさととは……というものなのでしょうが、オルガンが駒場にしかない以上遠きにありて（実際本郷は近いとは言えません）思っているだけとはいかなさそうです。

さて、今回お送りする曲のうちの一つ目は J.S. バッハの作曲による序曲（管弦楽組曲）第三番 BWV1068 より Air（G 線上のアリア）です。バッハの作品の中でも並外れた知名度を持つこの作品は、もともと序曲（管弦楽組曲）と呼ばれる一連の作品に含まれているものです。序曲とは、フランス風の序曲を冒頭に持つ作品に付けられる名前で、バッハが作曲したものは四曲残されています。この内の第三番の第二曲をヴァイオリンの G 線だけで演奏できるように編曲したの

が、いわゆる G 線上のアリアとして知られるものです。今回はその原曲のほうをオルガンで演奏します。主旋律の叙情性はヴァイオリンに劣るかもしれませんが、この曲のもう一つの魅力である低音部の進行がより伝わりやすくなっています。

もう一つの曲は D. ブクステフーデの作品です。ブクステフーデはバッハに先立つ時代の北ドイツの作曲家・オルガニストで、バッハにも強く影響を与えています。その特徴は、トッカータなどの自由曲においては即興な様式や派手な足鍵盤の運用に、コラール編曲などの宗教曲では敬虔さを感じさせる幻想性にあります。今日はそんな彼の作品から Danket dem Herrn（主に感謝せよ、主慈しみ深きゆえに）BuxWV 181 を演奏します。これはコラール変奏曲と呼ばれる種類の曲で、題名にもなっているコラールを定旋律とした変奏曲です。この曲は 3 つの変奏からなり、最初は手鍵盤の上声部に、次からは足鍵盤にコラールの旋律が現れます。

リコーダーにかまけていたせいでオルガンの方は覚束ないのですが、精一杯弾く所存です。よろしくおねがいします。

文学部言語文化学科フランス語フランス文学専修課程三年

豊岡 啓人（法学部）

BWV714 Ach Gott Und Herr

コラール集の最初の一つ。Google 翻訳すると「ああ神と主よ」とまあキリスト教っぽい曲ですが、そんなことよりこの曲はカノン、つまり右手で弾いたフレーズをしばらく遅れて左がほぼ同じに弾くというスタイルになっており（かえるのうたみたいな感じ）それでいてちゃんとした曲になっています。上手く作るもんだなぁと思っていたのですが、じつは調べるとバッハの作ったカノンには左が「ほぼ同じ」ではなく「全く同じ」といういわば完璧カノンもあり、そういうのを見るとやっぱりバッハは天才と思わされます。ちなみに足アリなので失敗するかも。

BWV1080 フーガの技法より 1 番

グールドの CD で聞き惚れて以来、いつかこんなのをオルガンで弾いてみたいと思っていたところ、この同好会に所属するに至りました。フーガの技法と言うだけあって晩年のバッハのすべてがつぎ込まれています。名曲です。楽器指定がないのでオルガンで弾いても邪道という感じがしないのも Good な点。

半音階的幻想曲

自分が最初にオルガン同好会で練習し始めた曲です。オルガンで弾いても綺麗で、かつ手鍵盤だけで弾ける曲はないかなーと探し出したのがこれで、実際ピアノで弾けばそこまで難しい曲ではありません。オルガンで弾くとタッチの違いのせいで結構難しいのですが、それでも手鍵盤だけでも結構やれるということは伝えられる曲だと思います。

現代のオルガン曲ほど足鍵盤も多用する複雑な曲となり難度も高いので、このスウェーリンクのようなある程度昔の人のを探してみると、難度が高くなかつ気に入る曲が見つけれられるかもしれません。

スーパーマリオブラザーズのテーマ（1-1）

はっきり言ってオルガンの名曲と言うのはあんまり知名度がないので、なんか他に簡単で、しかも誰でも知っている曲を弾こうということになり、この選曲。ファミコン世代でなくても、たぶんこのテーマは知っていると思います。本当になんでも弾いていいんだなと思ってくれればそれで十分です。

どうも、三年の豊岡啓人(トヨオカヒロト)です。日程調整や連絡をしています。駒場の思い出と言えばシケプリを信用したら実は全くのデタラメで、試験では答案に「授業ではやっていないと思われる」とだけ書いて途中退室したことがあります。当然不可。周りはずいぶん単位が来てたので、やっぱり授業は出なきゃいけないようです。シケプリは信じすぎないこと。あくまで利用するモノです。

話を戻して自分はピアノをやっていたので手鍵盤はあんまり苦労しませんでした。足が大変。今やっと音をはずす確率が減ったぐらいで、足だけでメロディーを歌う境地はまだまだ遠そうです。それでも足を使って何かを弾ききった時は、体全体で弾いたというか、充実感があります。

目下ダイエット中(のつもり)ですが下級生入部の際には是非一緒にいろんなところに飯を食べに行きたいと思うのでよろしく！

本郷キャンパスに電子オルガンを設置しました！

オルガン同好会は、中古の電子オルガンを購入し、東京大学学生支援課に寄付しました(4/2)。電子オルガンは本郷キャンパス第二食堂棟3階ホールにて自由に使用することができます。



駒場と本郷

どうも、打ち上げ係の山田です。

オルガンは始めたばかりで、まだ曲を完成させていないので、今 は出演しません。

でも、平澤さんが、「山田く～ん、一枚等ってって」「はい、かしこまりました」というネタをやりたいというだけの目的で、~~お~~めくりをさせようとしてきます。こまったものです。

大学生の不思議なところは、全くの初心者段階から始めたことが、大学生活を終えるまでには、ある程度の形に達するという事です。それが最も顕著なのは学問で、3年生から専門教育が始まり、4年生で論文を提出する。入門してから2年間で作品を求められ、それをほとんどの学生がこなすというのは、当たり前のように、実は凄まじいことです。

思うに、「他の人たちができたこと」という事実が、それを可能にしているのではないのでしょうか。過去に先輩がそれをこなし、周りの同輩たちもそれを目指すから、自分も諦めずに難関を越える。大学生は、そういった能力が非常に優れているように思います。

オルガン同好会でも、年々演奏レベルが上がっています。古参が腕を磨くのは当たり前ですが、新しく入って来るメンバーのレベルも上がって来ているような気がします。上級生のレベルが上がるに連れて、「できること」として認識されるレベルが上がり、その結果、こういった現象が生じているのではないのでしょうか。

オルガン同好会では、教養学部オルガン委員会、その他多数の方々のご支援を受け、駒場キャンパスの資源であるパイプオルガンに触れることができます。平日は概ね6時以降の練習なので、駒場の学生はオルガンを日常的に練習することができます。休日には社会人の方も時折いらっしゃいます。事前連絡は不要です。同好会の活動に興味をもたれた方は、公式ホームページで練習時間をチェックして、お気軽にお越し下さい。

公式ホームページ:

http://www.geocities.jp/organ_900/ (「オルガン同好会」でGoogle 検索)

プログラム制作 貝田 龍太(工学部)